

『生きがいについて』を読むなかで、多様な読み方を体験すること

心理学科 吉田章宏

皆さんと共に、神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房を読むことを楽しみたいと思います。読むに当たり、読み方を意識的に自覚し、自覚することにより、一層豊かに深く読むことを求めたいと思います。

0) 誤字、脱字、誤植、乱丁などはないか、と探して、有るか無いかを学ぶ。

装丁、用紙の紙質、印刷の質、活字のタイプ、印象と内容の調和など。

出版関係者、編集者、校正者、などの読み方、学び方。

例えば、一カ所、文献中の英文書名タイトルに誤りの綴りを見いだした(吉田)。

1) 論じられ解明されている主題の「内容」を学ぶ

ごく素朴に、『生きがいについて』述べてある本なのだから、「生きがい」とは何かを、読み取ろうと、そのようにこころを向けて、叙述に従って、叙述されている内容を、ただ読むということができる。ただし、課題として与えられたから読むという限りで、この書を読むという課題は受動的に、受け止めている。この読み方においては、「なるほど、最初は、『生きがい』なんて、ごく単純な詰まらないことだと思っていたが、ゆっくり読んでみると、いろいろなことがあるもんだな」などという感想が生まれるかもしれない。これは、恐らく、多くの読者の読み方であろう。そこでは、まだ、神谷さんの問題のとらえかた、展開のしかた、などの特徴というようなものは、まだ浮かび上がってこないし、そのような特徴から学ぶということもまだ出て来ない、かもしれない。

この学び方を通じて、答えられるようになる問いは、例えば、「『生きがい』とは何か、神谷の述べるところを記せ」であろうか。

ここで、「生きがい(感)」と「生きがいの対象/源泉」の区別は、さらっと書いてあるが、極めて重要な区別である、と思われる。

次に、読み手の立場に止まるところから、書き手の立場に移行する読み方も生まれ得る。

それはまた、研究の受益的消費者から、研究の生産者への移行の端緒でもある。

2) 解明の方法を学ぶ

「生きがい」の解明のために持ち出されてくる「問い」を学ぶ。「生きがい」の解明は、各章で、異なる、多種多様な具体的な「問い」によって、なされている。この問いの多くは、「生きがい」の解明のみでなく、「生きがい」とは異なるがしかしそれと似たところのある、あなた自身の抱えている問題を自ら解明する際に、活用可能であるかもしれない。そして、神谷さんの巧みな、深く鋭い「問い」の数々に、感嘆するようになるかもしれない。「なるほど、このように『問う』ことで、問題は次第に明らかにすることができるんだなあ」、そんな感想を抱くかもしれない。この学び方で、答えられる問いは、例えば、「神谷さんは『生きがい』を明らかにするに当たって、どのような鋭いあるいは巧みな『問い』を問うたか」、ということであろう。また、「神谷さんは、どのようにして、このような『問い』を考え出したのであろうか」、ということであるかもしれない。そして、これらの問いは、実は、神谷さんは、どのような「実践」「研究」「学問」を学んだから、このような問いを問うことができたのか、という問いに、次第につながって行くことになるかも知れない。

3) 全体の展開と構成の方法を学ぶ

「生きがい」は、決して単発的な「問い」によって解明されているわけではない。つまり、「生きがいは何か。」「生きがいはこれです。終わり。」という問答で終わってはいない。すると、ある「問い」につづく次の「問い」があり、そして、それら多数の「問い」が、全体として、相互に関連づけられながら、次第に、構造化されて行っているのである。

では、いかなる必然性をもって、ある「問い」に続く、次の「問い」が出されているか。もし、そうした必然性がなければ、それは、漫然とした、散歩風の随筆の集まりとなるであろう。本書では、目次から、その全体構造を読み取ることができる。目次を一緒に読み進めてみよう。

はじめに／

生きがいということば／生きがいを感じとる心／生きがいを求める心／生きがいの対象／生きがいをうばい去る者／生きがい喪失者の世界／新しい生きがいを求めて／新しい生きがいの発見／精神的な生きがい／心の世界の変革／現世へのもどりかた／

おわりに／

もちろん、さらに詳しくは、本文の全体から詳細に読み取らなくてはならない。

この学び方で、答えられる問いは、「神谷さんは、『生きがいについて』をどのように問い、問の系列を構造化して、結果として、本書の全体をどのように構造化して構成しているか」、ということであろう。

4) 著者（神谷さん）と著作の関係を学ぶ

これは、単なる好奇心から生じる学びでもあり得るが、自分が自分にとって必然性をもった研究を為すに当たっての、見習うべき一つのモデルとして、神谷さんを知る、という心の動きにおいても、なお生じ得るはずの学びである。

著者の神谷さんの心の世界を、この著作から読み取ることさえも可能かもしれない。

とはいえ、この著作において、巻末にも述べられているように、著者の神谷さんは、自分について多くを語っていない。したがって、この著作だけから、この関係を学ぶことは、わずかしかな可能でないし、また、それ以上を試みれば、根拠の薄弱な、危険な冒険ともなりかねないであろう。ともあれ、この学び方で答えようとしている問いは、例えば、「この『生きがいについて』を書いた神谷さんはどのような人で、何ゆえに、この本を書いたのか、また、それゆえに、このように書いたのか？」という問いであろう。この問いの背景には、読者である私について、「私は何について書くか、何ゆえに書くか、また、それゆえに、どのように書くか」という問いも隠されている可能性がある。

5) この著作の解明を支えている「学問」は何かを知る：

人間学的あるいは現象学的精神病理学である。もちろんそれだけではない。哲学あり、文学あり、医学あり、芸術あり、・・・・、東西両洋の豊かな教養に支えられている。

私は、このような解明を自分にとって可能にするには、どのような学問、芸術、文学、哲学・・・・を学ぶべきか、学びたいか、という問いが生じるであろう。

当然、巻末の注を頻繁に参照して、どういう著作が、重要であるかに注意を向けることになる。そして、そのような諸著作を探求する自分自身の道を歩み始めるようになる。

1冊の書物を読むと、そこから、たくさんの糸口が、引用文献や言及文献というかたちで、現れてくる。その糸口をたどると、また、そこに、新しい糸口が現れる。では、あなたにとって、現れて来た新しい糸口は何か。

6) この著作の解明そのものを、「生きがい」以外の、「生きがい」とどこか似ている事柄に、生かすことを学ぶ。

例えば、「福祉とはなにか」、「社会福祉とはなにか」、「思想とはなにか」、「教育とはなにか」、「自己の幸せと他者の幸せ」など、もろもろの人間の事象の解明にも、この著作で展開されている解明は生かされ得るであろう。

さらに、それを越えて、もろもろの事象の解明にも、例えば、「社会福祉実践に携わること」、「社会福祉実践の理論の創造に携わること」、などの解明に生かされるかどうか、それは、生かす者の世界の豊かさにも依存するであろう。

多くの人々のなかには、少しのことから、多くを学べる人もあれば、多くのことから、少ししか学べない人もある。そして、問いは、私自身はどうか、という問いであろう。

7) この著作を、さまざまな人々は、どのように読み、どのように学ぶであろうか。

これは、この著を読んだ、多くの人々の話を聞くことが大切である。私（吉田）は、これまでに、何千人という人々の読みを、既に、学んで来た。

上述の読み方をさらに詳細に細分しなければならないであろうし、内容的には、何処の何を、どう取り上げるかによって、多種多様であろう。

8) そのように多種多様に読める筈の、この著作を、少なくとも最初は、私はある特定の読み方でしか読まなかった。すると、そのように読む私は、一体、何者であるか。何ゆえに、私は、そのように読んだのであろうか。ここから、「読むは自己を読むなり」（芦田恵之助）が出てくる。何にせよ、書を読むことで、その書の読み方に、私が何者であるかが、映し出されてくる。あぶり出されてくる。

9) 私の「生きがい」は何かを、『生きがいとはなにか』にかかわる限りで、学び発見する。

多様に展開される、さまざまな人間の多様な「生きがい」のあるものに共感し、あるものに戸惑い、あるものに反発を感じることで、私は、『生きがいについて』に展開され提示されている事柄にかかわる限りで、私自身の「生きがい」についての自覚を促される。それは、私の世界からみれば、まだ断片的で混沌としているかもしれない。しかし、そのことを契機として、私の心の世界の組み替え、変革が始まっていることにもなるかもしれない。

10) 他者と自己を含めた人間の「生きがい」について、改めて、考えることを通して、人間とはなにか、そして、人間の生きている世界とはなにか、さらには、「生きる価値」とは何か、など、など、の諸問題へのより深い学びを促される。

11) 自分とは離れた、対象化された問題としての「生きがい」ではなく、私の生きている「生きがい／感」と「生きがい／の対象／源泉」を考えること、全体として自覚すること、を促される。この学び方によって答えられることになる筈であるのは、「私が、今まで自覚していなかったが、私がこれまで生きて来た、私の『生きがい』は一体全体何であるのか」という問であろう。

以上のような読みが、この1冊を契機に始めると、それは、研究についての見方や研究の在り方を変えるに留まらず、さらに、自分の人生観、世界観を変え、さらには、自分の生き方を根本的に変える働きさえも、持つに到るかも知れない。そこには、さらに一層、多様で深く鋭い読みが生まれるかもしれない。ご自分の読みを自覚することで、読みを深め豊かにして行ってください。

「読むは自己を読むなり」（芦田恵之助）

神谷美恵子 著作集

- 1 生きがいについて
 - 2 人間をみつめて
 - 3 こころの旅
 - 4 ヴァージニア・ウルフ研究
 - 5 旅の手帳より
 - 6 存在の重み
 - 7 精神医学研究 1
 - 8 精神医学研究 2
 - 9 遍 歴
 - 10 日記・書簡集
- 別巻 神谷美恵子 人と仕事
補巻 1 若き日の日記
補巻 2 神谷美恵子・神谷真左 往復書翰 浦口真左 著
うっわの歌

神谷美恵子 研究書／研究論文

- 佐藤幸治（1968）「人間の存在意義：神谷美恵子”生きがいについて”」
佐藤幸治著『死と生の記録』 講談社、192-198
- 高橋幸彦（1991）「神谷美恵子 その生涯と業績」
松下正明（編）『精神医学を築いた人びと』下巻、ワールドプランニング、225-236
- 江尻美穂子（1995）『神谷美恵子』 清水書院
- 伊藤隆二（1996）「人間性心理学の主題と方法について：神谷美恵子の『生きがい』 研究を中心に」、畠瀬稔（編）『人間性心理学とは何か』 大日本図書、65-97
- 宮原安春（1997）『神谷美恵子 聖なる声』 講談社
- 神谷美恵子東京研究会（1997）『神谷美恵子の生きがいの育て方』文化創作出版
- 柿木ヒデ（1998）『神谷美恵子 人として美しく』大和書房
- 西平直喜（1999）「神谷美恵子の生涯の心理・歴史的考察」
岡本祐子（編著）『女性の生涯発達とアイデンティティ：
個としての発達・かかわりの中での成熟』北大路書房、37-54
- 鶴田一郎（1999）「神谷美恵子の『生きがい研究』、その契機と過程」、
『人間性心理学研究』 第17巻第2号、164-175